

動物由来感染症の種類 I

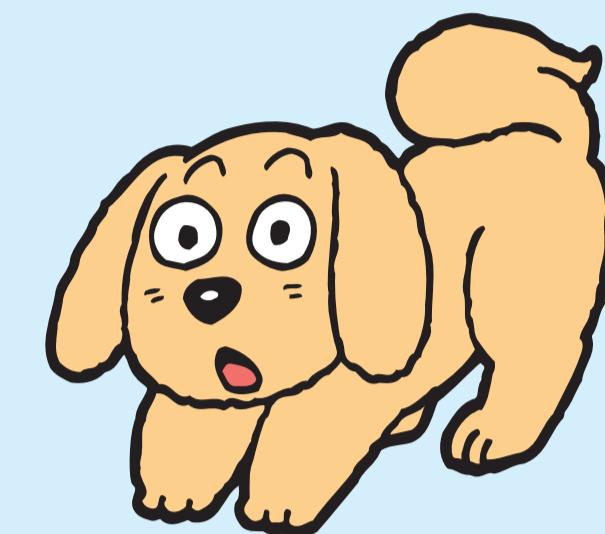
狂犬病

病気の特徴(症状)

通常1～3ヶ月の潜伏期間の後発症。初期はかぜに似た症状で、咬まれた部位に知覚異常が見られる。不安感、恐水症、興奮、麻痺、錯乱などの神経症状が現れ、数日後に呼吸麻痺で死亡する。発症してしまうと100%死亡する。

感染経路・感染状況

感染したイヌ、ネコ、アライグマ、キツネ、スカンク、コウモリなどに咬まれるなど唾液中のウイルスとの接触により感染する。日本では1957年以降国内の動物での発生はないが、近年にも、海外で犬に咬まれて感染した方が帰国後に発症して死亡するという例も確認されている。世界のほとんどの地域で発生しており、狂犬病による死者は年間3～5万人といわれている。とくにアジアとアフリカでの発生が多い。

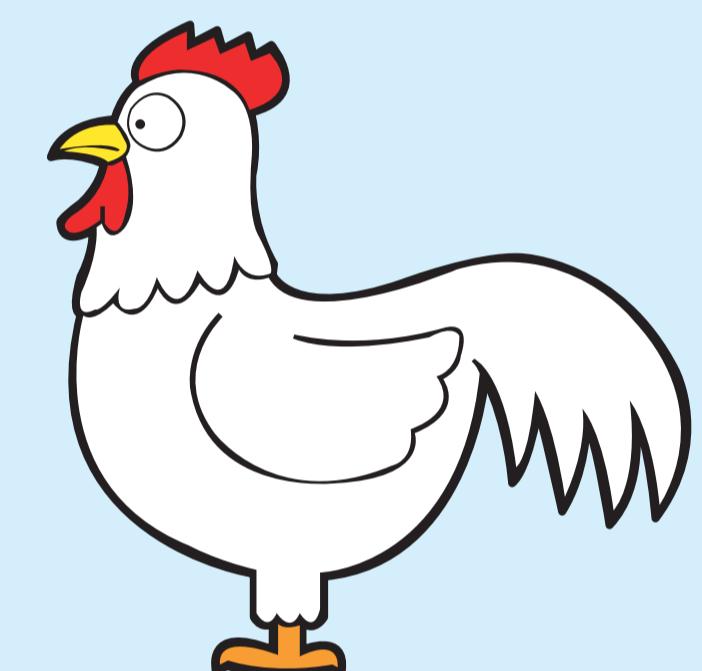


予防

- 万一の発生時に備え、日本では飼い犬に必ず年1回、狂犬病ワクチンを受けさせる(4～6月)。
- 飼い犬は市町村窓口で登録する(犬の取得時に1回)。
- イヌ、ネコ、アライグマ、キツネ及びスカンクを輸出入する場合は必ず検疫を受ける。
- 海外ではむやみに動物に手を出さない。
- 渡航先で狂犬病のおそれのある犬等に咬まされたら、すぐに傷口を石けんと水でよく洗い、医療機関ですぐに傷の処置と狂犬病ワクチンを受ける。

病気の特徴(症状)

ニワトリ、七面鳥、ウズラ等が病原性が強い鳥インフルエンザウイルスに感染すると、全身症状を示して死亡する。特にH5N1亜型はアジア・アフリカ等に拡大しており、感染した鳥や死亡した鳥と接触した人が感染する事例も報告されている。症状の多くは発熱、呼吸器症状(肺炎)であるが、まれに多臓器不全に至る場合もある。



感染経路・感染状況

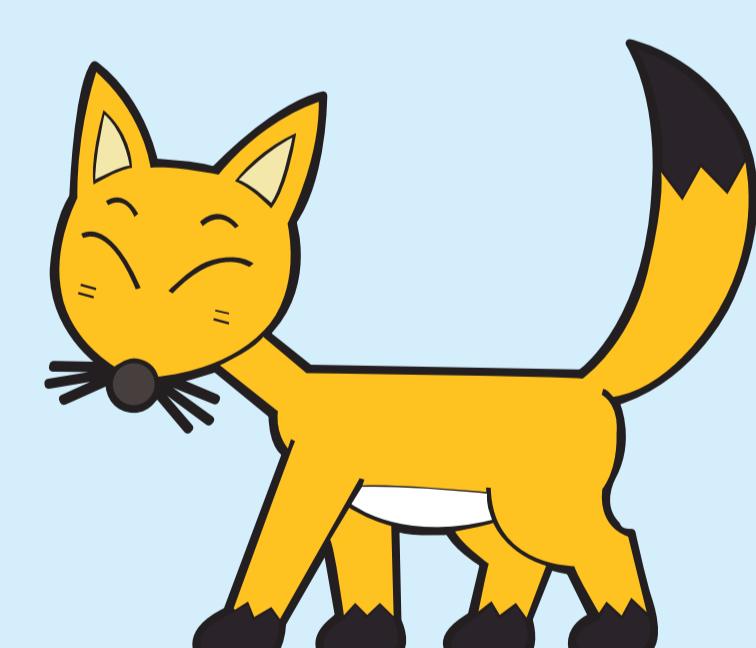
人は、感染した鳥やその排泄物、死体、臓器などに濃厚に接触することによってまれに感染することがある。日本では感染して発症した人は確認されていない。

予防

- 鳥インフルエンザの流行地域で病気の鳥や死んだ鳥にむやみに近づかない、触らない。
- 国内の鳥で発生があった場合には、防疫作業に従事する者等は徹底した感染防御と健康管理を行う。

病気の特徴(症状)

虫卵が口から入ることで感染し、虫卵は腸の中で幼虫になり、その後肝臓に寄生する。感染後、数年から数十年ほどたって自覚症状が現れる。初期には上腹部の不快感・膨満感の症状で、さらに進行すると肝機能障害を起こす。



感染経路・感染状況

日本では、北海道のキタキツネが主な感染源で、糞中に病原体であるエキノコックスの虫卵を排出する。北海道で放し飼いをして感染したイヌもキタキツネ同様に感染源となる。人はエキノコックスの虫卵が手指や、食物や水などを通じて口から入ることで感染する。人は血清等で検査可能であるが、治療方法は外科手術となる。

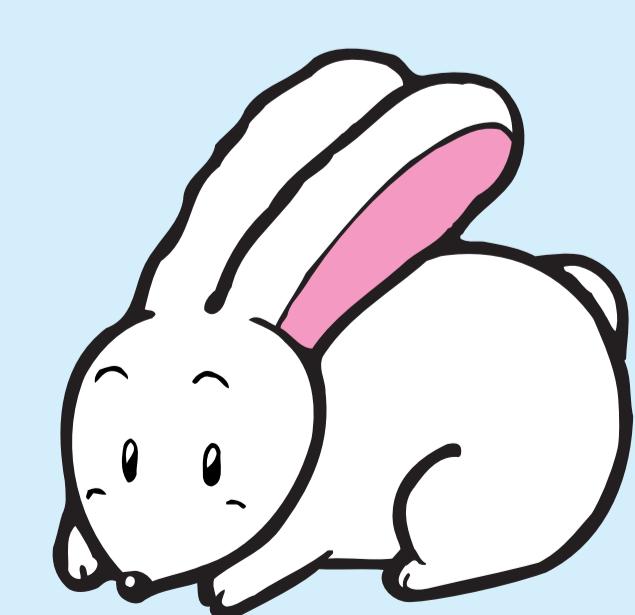
イヌは糞で検査可能。

予防

- キタキツネなどとの接触ができるだけ避け、外出後は手をよく洗う。
- キツネを人家に近づけないよう、生ゴミ等を放置せず、エサを与えない。
- 沢や川の生水は煮沸してから飲むようにする。
- 山菜や野菜、果物などもよく洗ってから食べる。
- イヌも感染した野ネズミを食べて感染するため、放し飼いをしない。

病気の特徴(症状)

ほとんどが感染3日目をピークとした感染7日以内の潜伏期間の後に、突然の発熱(38度以上)、悪寒、戦慄、頭痛、筋肉痛など感冒様の症状がみられる。その後弛緩熱となり長く続く。大多数では腋窩などのリンパ節の腫脹が認められる。病態によりリンパ節型、潰瘍リンパ節型、チフス型に分類される。



感染経路・感染状況

多くは野兎との接触、剥皮作業や調理による。その他の動物では、げっ歯類、猫、熊など。自然界ではダニと野兎、野生げっ歯類との間で感染が成立しているので、保菌したダニ等の節足動物の刺咬により感染する場合もある。また2008年3月、千葉県にて野うさぎを解体、調理し感染。(1999年以降、わが国においては9年ぶりの発生)

予防

- 流行地では死体を含めて感染野兎や野生げっ歯類との接触を避ける。
- 衣服や忌避剤によりダニ等の昆虫の刺咬を防ぐ。
- 野生動物を調理する際には直接触れない。また十分に加熱する。